

日本近代美術の蒐集家

——原三溪の美術蒐集記録「美術品買入覚」に見る

近代美術コレクションについて——

三上美和

〔キーワード〕 ①日本近代美術史 ②近代美術蒐集家 ③パトロン ④原三溪 ⑤日本美術院

はじめに——研究史と問題点

原富太郎（号三溪、慶応四年・一八六八—昭和十四年・一九三九）は、横浜を代表する実業家であり、美術史上では、古美術の大蒐集家として、また芸術家を支援したパトロンとして突出した存在であった。

三溪についての最も基本的な文献は、『原三溪翁傳』^{〔1〕}とそのダイジェスト版『原富太郎』^{〔2〕}である。これまで出版された三溪についての著作における伝記部分はこの二冊を基にしており、本論でも来歴は特に前者によっている。しかし、今回の調査で、東京専門学校^{〔3〕}の卒業、及び跡見学園の助教師の経験について、それら

の事実がなかったことを確認した。

前者は三溪の受けた教育を、また後者は三溪の美術の素養を語る上で重要であり、しばしば引き合いに出されるが、いずれも不確かなものであった。後者は既に白崎秀雄により指摘されているが、その後の文献にも散見するためここで訂正しておきたい。⁽³⁾

さて、日本近代の主要な美術蒐集家をまとめた文献に田中日佐夫による『美術品移動史―近代日本のコレクターたち⁽⁴⁾』がある。ここで三溪は、益田孝(号鈍翁、嘉永元年・一八四八―昭和十二年・一九三七)と共に、戦前の主要な美術蒐集家として重視されている。

さらに、佐藤道信による「歴史資料としてのコレクション⁽⁵⁾」により、これまで個別に取り上げられてきた美術蒐集家の動きとそのコレクションが、社会、経済の在り方と密接に結びついていたことが明らかにされた。ここで三溪は、国家の経済政策と歩調を合わせて発展を遂げた、繊維関係の実業家として取り上げられている。

一方、三溪が日本美術院の画家を中心に美術家を援助したことは、当初からよく知られており、現在まで近代美術史におけるパトロンとして認知されている。⁽⁶⁾ この点に関しては、まず、三溪と直接交流のあった矢代幸雄による一連の文献があり、その後竹田道太郎、石田治郎によって言及されている。⁽⁷⁾⁽⁸⁾⁽⁹⁾

このように三溪に関する文献は、近代の美術蒐集家、パトロンの中でも比較的豊富であるといえるが、多くは関係者の回想を元にしたものであった。そのような中で、「美術品買入覚」(図版① 以下「買入覚」と略す)と題され、作品一点一点についての売買価格が記載された資料が発見されたことは、三溪の美術蒐集に

ついでに具体的な内容が明らかになり、これまでいわれてきたことを検証することが出来るようになったという点で、画期的であった。本資料は、三溪の子孫により、他の資料と共に昭和六十二年（一九八七）に三溪園保勝会に一括寄贈されたものである。⁽¹⁰⁾

そこで本論では、近代作品に焦点を当て資料化し、⁽¹¹⁾これまでいわれてきた三溪による近代美術作品の購入と近代美術家への援助の実態について検討した。その結果、三溪関係資料からは、三溪の蒐集家、パトロンとしての多様な姿が浮び上ってきた。三溪について考えることで、近代における美術家への私的な協力、援助がどのようになされたのか、という問題を明らかにする契機としたい。

なお、今回は、これまで注目されてこなかった、三溪の近代美術の蒐集家としての面に焦点を当て、特に橋本雅邦（天保六年・一八三五—明治四十一年・一九〇八）、菱田春草（明治七年・一八七四—明治四十四年・一九一一）、横山大観（明治元年・一八六八—昭和三十三年・一九五八）を取り上げた。その他の芸術家との関わり、古美術蒐集については別稿に譲りたい。

一、三溪旧蔵美術コレクションの始まり（明治二十六年—明治四十年）

① 原三溪旧蔵近代美術コレクションの概要

「買入覚」から近代美術作品を抜粋し、記載順に並べ、「買入覚」以外の三溪関係資料その他の資料で補足

し整理したものが資料①である。なお、この「買入覚」は、近代美術に関しては、先述したように主要な作品が石田によつて、また資料の最初の部分及び古美術品の一部が白崎秀雄によつて紹介されている。⁽¹²⁾

「買入覚」に記載されている三溪旧蔵近代作品二百六十点のうち、そのほとんどが日本画作品である。三溪の購入した全作品はおよそ四千百五点あるため、近代作品はその一割以下であるが、各作家の代表作も多く、充実した内容を示している。

その傾向を、年毎の購入作品数と購入金額で見ると(資料②)、明治四十一年(一九〇八)に数、金額共に急増している。そして、数は大正四年(一九一五)、金額は大正二年(一九一三)が最も多く、この時期がピークである。その後は大正七年(一九一八)を境に減少し、大正十三年(一九二四)以降は古美術のみとなる。

なお、近代美術コレクションの傾向を把握するため、便宜的に初期(明治二十六年―四十年)、充実期(明治四十一年―大正七年)、終焉期(大正八年―昭和六年)の三期に分けた。

② 初期近代美術コレクションの特徴

初期のコレクションを見ると、渡辺省亭(嘉永四年・一八五一―大正七年・一九一八)、その翌年には滝和亭(文政十三年・一八三〇―明治三十四年・一九〇二)、岸竹堂(文政九年・一八二六―明治三十年・一八九七)といった、三溪と同時代に活躍していた作家の作品を購入している点が目⁽¹³⁾を引く。これらの

購入は、三溪が古美術とともに、同時代の美術にも関心があつたことを示している。中でも渡辺省亭の「雪中群鴉雨中白鷺（双幅）」は、三溪が購入した最初の同時代の日本画であつた。本作品は、資料①に見られる通り、この年の最高額である二十円で購入され、「買入覚」第一冊目の冒頭に書かれており、少くとも大正九年までは手元に置かれていたこと⁽¹⁴⁾から、三溪にとつて印象深い作品であつた可能性⁽¹⁵⁾がある。

二、援助の始まりとコレクションの充実（明治四十一年―大正七年）

① 政府主導の近代美術保護

先に見たとおり、近代美術史における美術蒐集に関しては、多くはないが充実した内容の研究が行われ、近年新たな展開が見られる。しかし、美術の援助者、つまりパトロンについての研究はさらに少く、そのためパトロンとしての三溪も明確には位置づけられていない。

そこで、三溪の行つた個人による援助より先に、まず政府による美術保護の動きがあつたことを確認し、三溪の援助を、当時の歴史的、社会的背景を踏まえ、その流れの中で捉えてみたい。

近年、殖産興業政策と美術振興策に関する研究は、明治初期の輸出産業への関心の高まりと共に深められ⁽¹⁶⁾つつある。殖産興業政策としての美術振興策とは、西欧諸国で催される博覧会を通じて日本の工芸品を西欧諸国に売り込み、その利益により国を富ませるというものである。

そのような政策の一環として明治十三年（一八八〇）、大蔵省、内務省及び博覧会関係者、輸出業者を中心に結成されたのが龍池会であるが、この龍池会には三溪の妻の祖父であり、横浜の生糸貿易で多額の利益を得て原家の基礎を築いた、原善三郎も入会していた。⁽¹⁷⁾ また同会がパリで開催した展覧会には三井物産会社が協力しており、近代の実業家達が、同時代美術にかなり積極的に関わった様子がうかがわれ、近代以降の美術を支えた実業家と美術の関係の一端が垣間見られる。

そしてこのような官民一体の美術保護は、明治四十年（一九〇七）から行われた文部省美術展覧会（以下文展と略す）においても依然として続いていることが、当時の雑誌記事からうかがわれる。

明治四十年（一九〇七）十二月の『美術新報』の時報欄には、「実業家の売約」という項で、第一回文展では、文部省の買い上げのための費用が足りず、実業家達が団結して売約したという記事があり、岡倉天心も菱田春草の「賢首菩薩」（東京国立近代美術館蔵、明治四十年）を売約している。⁽¹⁸⁾ 「賢首菩薩」は、天心の依頼により、三溪によって購入されたとされ、それは資料①でも確認出来るが、それ以前に既に天心の名義で売約されていたのである。三溪が近代美術に関わった時期には、このような美術政策が前面に押し出された時代であり、三溪も間接的にはあるが、その動きに関わっていたことを確認しておきたい。

② 岡倉天心との出会い

三溪が日本美術院を中心とした近代美術家と関わるようになったのは、天心の依頼がきっかけであった。

しかし、両者がいつから知り合うようになったかは不明であり、明治三十三年（一九〇〇）、原家の当主善三郎の銅像除幕式に天心が参加した、という中村溪男による指摘が最初とされる。⁽²¹⁾しかし、その一年前の明治三十二年に、日本美術院に名誉賛助会員として加入しており、⁽²²⁾もう少し遡る可能性がある。なお、日本美術院の賛助会員には大倉喜八郎といった実業家や、官僚、文学者など多様な人々が関わっており、三溪もその一人として重要な位置を占めていたといえる。

なお、資料①を見ると、三溪に購入された日本美術院系作家の作品は、明治三十五年の橋本雅邦のものが最初である。いずれにせよ、両者が関係をもったのは、明治三十年代初め頃と考えられる。

両者の出会った時期は正確にはわからないが、天心が安田靫彦（明治十七年・一八八四―昭和五十三年・一九七八）、今村紫紅（明治十三年・一八八〇―大正五年・一九一六）の援助を明治四十四年（一九二一）に要請し、本格的な援助が始まる。さらに、天心は死の一月前、病身にも拘らず、⁽²³⁾三溪と「観山会」という一種の同好会を企画している。死後、若い作家たちの保護者として、三溪に大きく期待していたと思われる。⁽²³⁾

さらに、三溪は画家だけでなく、平櫛田中（明治五年・一八七二―昭和五十四年・一九七九）を初めとした木彫家も保護していたことを「買入覚」で確認したが、この援助も、天心の蒔いた種を三溪が育てた、という面が見え、三溪が田中の援助を始める契機は、やはり天心の斡旋であった可能性が高い。⁽²⁴⁾というのも、「日本彫刻会」は、明治四十年（一九〇七）、⁽²⁵⁾木彫の振興を図った天心が主導者となり、田中、山崎朝雲、米原雲海らの木彫家が結成した会であり、その後も天心がこの会の振興に骨を折っていたからである。⁽²⁶⁾三溪がこの会を援助したのも、天心の勧めだったのではないだろうか。これまで三溪の援助については日本画家に

重点が置かれ、彫刻家に関するまとまった論考は、林サエによる⁽²⁷⁾論考のみである。三溪旧蔵近代美術品には、田中の三十代後半から四十代後半（明治末から大正）にかけての代表作が集っていたことが資料に見えることから、三溪が天心の後援したこの会に共鳴して援助を行ったということは十分考えられる。⁽²⁸⁾

以上のことから、三溪は、天心が晩年最も期待したパトロンであり、三溪もそれに充分応えたということが出来る。⁽²⁹⁾つまり、天心が生んだ日本美術院の作家達を、三溪が育てたと見ることも可能であり、ここに、日本近代美術において重要な役割を演じた美術批評家とパトロンの出会いと協力を見ることが出来るのである。

③ 近代美術の蒐集家としての原三溪

さて、「買入覧」を見ると、パトロンとしての三溪像の一方で、近代美術の蒐集家としての側面も浮かび上がってきた。

初期には橋本雅邦、その後菱田春草を蒐集家の目で蒐集し、下村観山、横山大観の作品も、パトロンと同時に、熱心な蒐集家としての一面をのぞかせている。

橋本雅邦の作品は、大観、観山に次いで多い三十点である（資料③）。蒐集された作品は現在不明なものが多いが、画商が記されていないことから、直接交渉があった可能性もある。その中には、明治四十三年（一九一〇）に開催された雅邦の遺作展への出品作品も含まれていた。⁽³⁰⁾

三溪が雅邦の存命中に援助をしたという記事もあるが、⁽³¹⁾蒐集された作品の大部分は雅邦の没後入手された

ものである。明治四十三年には「狙公（猿廻し）」（明治三十年・一八九七、東京国立博物館（以下東博と略す）蔵）を五千円という破格の値段で美術商から購入しており（資料①）、明治四十年（一九〇七）から始まった文展にもこれほどの高額な作品は後まで出ていない。⁽³²⁾

この「狙公（猿廻し）」（図版②）は、当時としては進歩的な作品とされている。⁽³³⁾ もっとも、三溪が購入したのはこの絵の描かれた明治三十年ではなく、明治四十三年であったため、三溪がこの絵の新しさを評価して購入したかどうかについてはやや疑問が感じられるものの、相当な愛好家の一人であったと考えられる。菱田春草の一連の購入作品も、こうした援助と無関係に購入された蒐集品である。

先述したように、天心の依頼で春草作品を購入した三溪は、その当時乗り気ではなかったと伝えられている。⁽³⁴⁾ にも拘らず、その後はかなり高額で画商から購入している点は、雅邦の作品の購入と同様である。春草の作品は作品数では九番目であるが（資料②）、購入金額では大観、観山、雅邦に次いで四番目に多くなっている。これを資料①で確認してみると、春草の作品は、「賢首菩薩」を除いて全て没後に購入されている。⁽³⁵⁾

それらの一つである「椿に猫」（図版③）は、雑誌記事によると明治四十四年（一九一二）に「賢首菩薩」と交換したとされているが、⁽³⁶⁾ 「買入覚」には大正七年（一九一八）に購入とあり（資料①）、記録と異なる。またこの話は、細川護立による回想では別の作品と交換したことになる⁽³⁷⁾ っており、やや混乱しているが、いずれにせよ、三溪がこの時点で春草に興味を持ち始めていた形跡があることが注目される。

なお、勅使河原純によると、明治四十二年（一九〇九）第二回文展で出品された春草の「落葉」は、その

後二年も経たないうちに七千円に暴騰したとい⁽³⁸⁾う。

このように、春草の作品は、没後すぐに作品が暴騰したが、その時と三溪が春草に興味を持ち始めた時期が重なっているといえる。なお、本作品は、春草の代表作である文展出品作「黒き猫」(永青文庫蔵、明治四十三年・一九一〇)のいくつか存在する類似作品の一つであることから、本作品が人気の高い作品で、注文が多かったことを示している。

また、大正九年(一九二〇)には「鹿(秋林遊鹿)」(西宮市大谷記念美術館蔵、図版④)を三溪旧蔵の近代作品では最高額である一万三千三百円で購入している。もともと、同年の総購入金額は四十七万六千四百六十八円であり、相当な高額に上っている(資料②)。「買入覚」によると、同年購入された「浮線綾蒔絵螺鈿手箱」(サントリー美術館蔵、国宝、鎌倉時代)は二十七万五千円で、古美術の最高額と比べれば二十分の一に過ぎず、新画と古美術の市場価値は比較にならない。⁽³⁹⁾

とはいえ、やはり同年に購入された速水御舟の作品「比叡山」(東博蔵、大正八年・一九一九)、「京の舞妓」(東博蔵、大正九年・一九二〇)が二点で千五百円という額を見れば、いかに春草作品が高額であったかがうかがえ、同時に三溪の熱の入れようも分る。東京美術倶楽部の入札記録における昭和前期の春草作品の取引引き額を確認したところ、本作品の取引額は、三番目に高額であることが分⁽⁴⁰⁾った。同記録によると、昭和前期の取引額では橋本雅邦が群を抜き、春草はそれに次ぐ額を示し、この二人が最も高額で入札されていた。三溪が大正九年に購入した時の菱田春草の人気は非常に高いものであったといえる。

以上のことから、三溪は春草の作品を、援助とは無関係に購入した近代作品の中でも、とりわけ蒐集の対

象として高く評価していることが分る。雅邦及び春草の作品の購入で共通する点は、いずれも当時としては破格の高額であること、援助とは無関係であること、画商から購入していることである。つまり、雅邦、春草は明治末から大正にかけて、既に古美術と比べ得る程の市場性を持っていたと考えられる。現在から見ると近代の画家として大観、観山らと同様に見なしてしまいが、少くとも東京画壇においては当時の同時代作家とは比較にならないほど人気が高かったことが考えられ、三溪もそういった同時代の人気作家にやはり関心を抱いていたのである。

三溪は「賢首菩薩」が発表された当初は春草の作品の革新性を理解していなかったが、その後市場性の高まりと歩を一にして関心を高めている。このことから三溪の趣味がやや保守的であったことが分り、三溪を初め、当時の近代美術の鑑賞者たちの近代美術に対する理解の度合いの変化も感じられる。

さて、「買入覚」によると、三溪が購入した最初の近代美術作品は、下村観山による「大原御幸」であり、観山は三溪が好んだ作家としてしばしば取り上げられている。⁽⁴¹⁾ところが、「買入覚」で調べてみたところ、意外にも観山より横山大観の方が作品数、購入金額とも多く、近代作家で一番多いのも大観の作品であることが分った（資料③）。⁽⁴²⁾これまで、三溪と大観はあまり気が合わず、また三溪も「あいづは激し過ぎてなあ」と語ったとされ、⁽⁴³⁾観山ほど親しくなかったと指摘されるに留まっている。しかしながら、購入金額、作品数とも大観の作品は群を抜いており、三溪旧蔵近代美術品の中心は大観の作品であるといっても過言ではない。また、三溪は大正期に大観にかなりの注文制作を依頼しており、しかもいずれも非常に完成度の高い作品であることも注目される。

三溪の所蔵した大観の作品は他に類似の作品が数点確認されているが、それらは大観が鑑賞者の要求に応えた結果であり、三溪もその一人であったと思われる。この購入は、作品を愛好している点、蒐集が作家への援助につながっている点で、パトロンとしての面もあり、雅邦、春草の作品の購入とは性格を異にしている。

「買入覚」で確認される最初の大観の作品は明治四十四年（一九一）の「達磨」であり、この年一度に七点購入している。その当時大観は、文展の審査員となり、また明治四十二年（一九〇九）、「流燈」（茨城県近代美術館蔵）を第三回文展に出品して好評を博し、政府買上げとなるなど、五浦時代の苦闘が認められた時期であった。この「流燈」については三溪も注目していた。⁽⁴⁵⁾

その後購入された大観の作品で重要なものは、明治四十五年（一九一二）に購入されている「山路」である。この作品は明治四十四年第五回文展に出品された「山路」（図版⑤、永青文庫蔵）と同じものを、三溪が直接大観に依頼して描かせたといわれる作品で、⁽⁴⁶⁾類似の作品が二点あることが指摘されている。一点は京都国立博物館（以下「京博」と略す）蔵の「山路」（図版⑥）であり、⁽⁴⁷⁾もう一点は、「辛亥之秋」という書き入れがあるため、やはり明治四十四年の作とされている作品である（図版⑦）。大観による京博蔵の同作品の受け取りの札状が三溪園に残されており、「壬子二月六日」、つまり明治四十五年、三溪から直接大観に千円が支払われていることを確認した。

本図は伊香保の風景を描いたとされている。一見粗略な作風であるが、様々な工夫が随所に見られる。試みに三点を比較してみると、旅人の表情や松の色彩の強弱など、細部に違いが見られるものの、類似の作品

であるといえる。

本作品は当時としては斬新な手法で描かれているためか非常に話題を呼び賛否両論であったが、当時の批評ではおおむね好評で迎えられた。⁽⁴⁸⁾ 文展に出品された「山路」がいくらで購入されたのか不明であるため、三溪の支払った金額がどの程度のものであるかの判断が難しいが、同じ文展出品作や、その三年前に描かれた「流燈」の金額と比べてみると、相当な高額であった。⁽⁴⁹⁾

一般に注文制作という場合、注文者の意図を汲み入れて制作された作品を想定することが多いと思われるが、このように既成の作品と同一のものを注文する場合も、やはり注文制作と考えられる。「山路」の場合、文展出品作以外の類似の作品については、構図やモチーフの異同が作者の創意という観点だけで語られているが、当時の鑑賞者の要求という、これまでは別の角度からの位置付けがなされるべきである。

三溪は「山路」と同年に、やはり千円で購入している「日蓮上人」⁽⁵⁰⁾（明治四十四年、図版⑧）を、「山路」と同様に注文したといわれている。⁽⁵¹⁾ 本作品の場合、日蓮の描写に大きな違いが見え、元となったとされる「日蓮」⁽⁵²⁾（「大観会」に出品、図版⑨）を、ちょうど反対にした構図となっており、ほぼ同様の大きさである両者を並べて展示すれば、両面から日蓮を見ているかのような印象を与えている。これが三溪の注文によるのか大観の工夫によるのかは不明であるが、本主題の作品は数点あり、需要はかなり高かったと思われる。以上のことから、明治四十四年頃、既に大観作品は入手が難しく、⁽⁵²⁾ 三溪は初め大観の作品をこのような形でようやく入手していたと考えられる。

三溪はこの後頻繁に大観に注文制作を依頼し、さらに文展や院展の出品作を購入しているが（資料①）、

そのきつかけが、この「山路」の注文制作及び高額での購入であったと考えられる。

その後注文したとされる作品には、大正二年（一九一三）の「柳蔭」（東博蔵）、「雪中富士図屏風」（東博蔵）がある。⁽³³⁾ この内、大観が三溪園に滞在して描いたといわれる「柳蔭」（図版⑩）を取り上げる。⁽³⁴⁾ 本作品

は大観の作品中最大級の作品である。大観がこのような横幅十メートル以上の作品を描いたのは、おそらく初めてであるとされ、展覧会出品作でないことが信じられないほど完成度の高い作品であると評されている。⁽³⁵⁾

この柳の大木の下でロバを連れ、主人を待つ召し使いが昼寝をする場面は、伝周文の「四季山水図屏風」（東博蔵、重文、室町時代、図版⑪）との類似点が指摘されている。⁽³⁶⁾

そこで「柳蔭」と比較すると（図版⑫—⑭）、主人を待つ従者がユーモラスに描かれている点に共通点が見られるが、従者と柳を拡大することで、鑑賞者は従者と一緒に、清涼感を感じることが出来る。また、「四季山水図屏風」で従者のすぐ近くに描かれた主人を、柳の陰に隠すことで、より従者に視線を集中するように工夫されている。⁽³⁷⁾

なお、この作品の制作年代に関しては若干疑問があるが、⁽³⁸⁾ 少くとも、大観がこのような大作を心置きなく制作出来たのは、三溪というパトロンがいたからであり、三溪を本作品の最初の鑑賞者であると想定したい。こうした大観作品の蒐集は、大正十年（一九二一）、再興第八回日本美術院展覧会に出品された「洞底の夜」（東博蔵）が最後である。

三、蒐集、援助の終焉（大正八年―昭和六年）

「買入党」の記録から、近代作品の購入数は、大正三年（一九一四）をピークに年毎に減り、大正十二年（一九二三）を最後に記録からなくなっている（資料①）。大正十二年には関東大震災があり、これ以後蒐集はなくなったとされているが、資料によると、それ以前から近代美術の購入数は減っている。

また、大正四、五年の総購入金額、購入数はその前後に比して非常に少く、古美術品の数、金額ともに減少している一方で、近代美術品の割合は大きくなっている。このことから、明治末から大正初期の一時期、古美術の蒐集が押えられる形で三溪の近代美術への関心が高まり、蒐集も盛んであったことが分る。その後、震災以降は美術品の蒐集そのものが控えられ、徐々に売却されていたことも資料から裏付けられる。

それではそういった傾向が三溪の実業家としての活動と関わりがあるのかといえば、大正三年は第一次世界大戦の勃発した年であり、世界貿易の縮小を反映して横浜の経済も沈滞したが、その後大正四年から十一年までは未曾有の好景気であったとされ、また原合名会社の大正二年の生糸取引高も上向きであり、会社（9）の事情が蒐集内容に反映したとは思われない。三溪のこうした蒐集の変化の解明には、今後新たな資料の出現を待つほか無く、なぜこの時期古美術の購入数が減っていったのか分らないが、ちょうどこの時期、三溪の近代美術との関わりが始まっていることから単純に考えると、何らかの事情で高価な古美術品を買えなくなり、より小額で意義のある、若手作家の保護育成、同時代作家の作品蒐集に関心をもったのかもしれない。これまで見てきたことから、三溪が一時期近代美術に深く傾倒したということは確かである。三溪の事業の

面などから新たな資料を探し、この点については今後検討したい。

おわりに

「買入覚」の分析及びその他の資料から、三溪が近代美術においても、熱心な愛好者であり蒐集家であったことが分った。資料には、小林古径、安田靉彦、今村紫紅といった、若手作家への援助も見られる。これら若手作家への援助は近代美術の発展にとって重要であり、改めて論じたい。

さらに、三溪は、本論でも触れたように、古美術の大蒐集家であったが、それは明治以降、現代につながる古美術品の鑑賞の在り方が形成される時期でもあった。三溪の古美術蒐集を明らかにすることで、近代美術蒐集も含めた三溪の蒐集家、パトロンとしての全体像を理解することができると同時に、近代における美術鑑賞の在り方の一端も解明できると思われる。制約はあるが、合わせて今後の課題としたい。

注

- (1) 藤本實也編。本書は稿本であり、現在は複写のみが残されている。筆者は三溪園保勝会に保管されているものを参照した。

(2) 森本宋、時事新報社、一九六四年。

(3) 三溪が早稲田大学に入学したことは(1) 藤本前掲書に記されている。前早稲田大学大学史資料センター事務長金子宏二氏の御教示によると、『明治三十年十二月報告 校友会名簿』に、三溪が明治二十九年（一八九六）に校賓となった記載があり、三溪が早稲田大学の前身である東京専門学校に入学したことを確認した。「校友会規則第二条」によると、必ずしも卒業者だけでなくその後活躍した者は会員の推薦によつて校友会員になれる。三溪が東京専門学校に入学したとされているのは明治二十一年（一八八八）であり、その八年後の二十九年に校友会員に推薦されていることから、卒業していない可能性が高い。

白崎の説は白崎秀雄『三溪 原富太郎』（新潮社、一九八八年）、四十八―四十九頁参照。

跡見学園資料室の中野一夫氏の御教示によれば、当時まだ職員名簿のようなものはなかったが、そういった事実があれば跡見花蹊の日記に記されているはずとのことであり、やはり助教師説は否定された。

跡見花蹊（天保十一年・一八四〇―大正十五年・一九二六）は明治八年（一八七五）跡見女学校を創設し、生涯を女子教育に捧げた人物である。花蹊は三溪と原屋寿との結婚を媒酌し、三溪が原家と関わりを持つことになるきっかけを作ったという点で、三溪にとって非常に重要な人物であった。

(4) 『美術品移動史』（日本経済新聞社、一九八一年）。

(5) 明治美術学会編『近代画説二』（一九九六年）。

(6) 明治四十五年（一九一二）の『美術新報』（十一巻五号、三月十一日）に記載されている「時言」には、日本画旧派は古画の形骸に過ぎない、と批判した後で、三溪を、新派を擁護する著名な古美術蒐集家として取り上げている。青木茂は「これを見ればすでに瀧精一の緒論とともに、原三溪の美術運動も注目されていたようである。」と指摘している（青木茂編『明治日本画史料』中央公論美術出版、一九九一年）、二百七十一頁。

- (7) 『私の美術遍歴』（岩波書店、一九七二年）、『芸術のパトロン』（岩波書店、一九七七年）、『美しき物への思慕』（岩波書店、一九八四年）、『忘れ得ぬ人びと』（岩波書店、一九八四年）。
- (8) 竹田道太郎『近代日本画を育てた豪商 原三溪』（有隣堂、一九七七年）。
- (9) 石田治郎「原三溪翁の近代絵画コレクション」「美術品買入覚」から「〔御舟・青樹・鶏村〕―原三溪ゆかりの作家たち―」展カタログ、三溪園保勝会、一九九一年、「原三溪と院展の作家」（『日本美術院百年史第四巻』一九九四年、川幡留司と共著）。
- (10) 第三巻のみ表題が「美術品買入扣」となっているが、他の四巻と資料中に「扣」の名称が見られないため、本資料の名称を「美術品買入覚」に統一した。ここで参照した三溪関係資料（全て三溪園所蔵）は、「清風居蒐蔵目録」、「鄰花庵^{マヤ}蔵品書画器物」、「天 隣花庵什物書画彫刻」、「隣花庵什器書画器物」、「地 鄰花庵^{マヤ}什物茶器」、「松風閣蔵品書画彫刻」、「松風閣蔵器諸種器物」、「大正十三年春正月 書画目録 清風居鑑蔵」（以上所蔵目録）、「三溪文庫 除去品覚」（売却、贈呈品の記録）。
- (11) 近代における古美術蒐集や近代茶道の研究の上でも、三溪による古美術蒐集の研究は不可欠であるが、今回は一部触れるに留めた。
- (12) 石田の研究については（9）参照。白崎前掲書、八十九頁―九十三頁参照。
- (13) 滝和亭は、明治二十五年頃最も流行した画家の一人とされ（大門一樹、『物価の百年』早川書房、一九六九年）、三溪の購入した当時、その実力を高く評価されていた。
- (14) 蔵帳「松風閣蔵品書画彫刻」の「明治大正画」の部の最後に「省亭 烏鷺双幅」と記載がある。速水御舟の「京の舞妓」（大正九年）が記載されているため、この年が省亭作品の制作年及び所蔵期間の下限である。その後大正十三年の年記のある蔵帳には記載がない。

- (15) 明治二十六年の省亭の代表作「雪中群鷄図」（東博蔵）によりその作風の一端が推測できる。
- (16) 「明治デザイン誕生」（東博編、国書刊行会、一九九七年）、佐藤道信「明治国家と近代美術」（吉川弘文館、一九九九年）、『万国博覧会と近代陶芸の黎明』展カタログ（愛知県陶磁資料館、二〇〇〇年）など。
- (17) 青木茂「大日本美術新報」解説（『大日本美術新報別冊』ゆまに書房、一九九〇年）五頁参照。
- (18) 「大日本美術新報」第二号、一八八三年十一月三十日の記事より。なお、善三郎は龍池会の開催した例会に古美術の出品をしていた（『龍池会記事』（『大日本美術新報』第三号、一八八四年一月三十一日））。
- (19) (18) 前掲記事より。
- (20) 「美術新報」第六卷第十六号、明治四十年十一月二十日の記事より。
- (21) 中村溪男「今村紫紅―近代日本画の鬼才」（有隣堂、一九九三年）七十四頁。なお、中村が引用したのは「岡倉天心全集別巻」（平凡社、一九八一年）巻末資料である。
- (22) 「日本美術」七号（明治三十二年）（『日本美術院の創立』補足資料（『日本美術院百年史』第二卷、一九九〇年収録）に賛助会員、名誉賛助会員、特別賛助会員の規則が掲載されている。賛助会員は、斎藤隆三によると、一口五百円を供出して漠然と募った、とあるが（斎藤隆三『横山大観』中央公論美術出版、一九五八年、百十頁参照）、その区別は、日本美術院の松浦あき子氏の御教示によれば、具体的な資料は残されておらず不明であるが、寄付金の額による可能性が高いという。
- (23) 下村英時「下村観山」（座右宝刊行会編集、大日本絵画、一九八一年）百六十五―百六十七頁参照。
- (24) 明治四十三年（一九一〇）の日本彫刻会第二回展で田中の「法堂二笑」が四百九十円で購入されたとする記事がある（『中央新聞』明治四十三年十月二十三日）。記事では購入者は匿名であるが、「買入覚」の明治四十四年の項に記録がある。記事では他にも山崎朝雲の「張果郎」を百五十円で、米原雲海の「無弦琴」を二百七十円で、

加藤景雲の「大江定基」を二百三十円で購入しているが、記録は田中だけである。

- (25) 中村伝三郎「日本彫刻会小史」(美術史學會編、『美術研究』第百九十号、一九五七年)。

- (26) 『岡倉天心全集』第七卷、書簡番号五〇一(平凡社、一九八一年)。天心は明治四十四年、牧野伸顕に第三回

日本彫刻会の案内と招待状を送り、米原雲海、山崎朝雲の作品を推奨している。

- (27) 林サエ「原三溪と近代彫刻」(『近代日本画のあけぼの』横浜高島屋、一九八七年)。

- (28) 東博に所蔵されている「灰袋子」(大正二年・一九一三)、「樹に倚りて」(再興第一回院展、大正三

年・一九一四)、「森の書」(再興第四回院展、大正六年・一九一七)、「烏有先生」(再興第六回院展、大正八年・一九一九)の四点が、三溪旧蔵であったことを確認した。

- (29) 日本美術院は、明治三十九年(一九〇六)に五浦に移転された後、約一年半で実質的な休業状態となったとさ

れ、天心の関心がいつそう、囑望する若手作家の今後に向いたとも思われる。

- (30) 雅邦門下の画会である二葉会主宰で行われた「雅邦翁遺墨展覧会」で、三溪が「山水画卷物」を出品したとい

う『美術新報』の記事。

- (31) 村上文芽「絵画振興史」(島田康寛『京都の日本画』京都新聞社、一九九一年)、四百八十五頁参照。

- (32) 第七回文展(大正二年・一九一三)でも、最高額は鹿子木孟郎の作品で千百円である。

また、東京美術倶楽部の入札記録を見ると、雅邦の作品の価格は明治末から大正初期では主に千円前後である(東京美術研究所編『東京美術市場史』東京美術倶楽部発行、一九七九年)。

- (33) 『近代日本美術の軌跡』(東博、一九九八年)の古田亮解説参照。

- (34) 小高根太郎によると、「賢首菩薩」は当初三百五十円という値段が付いていたが売約者が無く、同情した岡倉

天心が原三溪を訪問し、無理矢理百円で預け、その後三溪は明治四十四年(一九一七)巽画会主催表装競技会

に出品された「椿に猫」と交換したので、やがて「賢首菩薩」は細川護立の手に入った、という話が斎藤隆三の談話として紹介されている(小高根太郎「菱田春草―その生涯と作品」、菱田春夫編『菱田春草』大日本絵画巧藝、一九七六年、四十三頁)。

- (35) これらの作品の内、三溪の晩年(あるいは没後)に中止になった三溪蒐集品の売立目録で、「鳩」と「鹿」は、それぞれ「温麗」(明治三十四年・一九〇四)、「秋林遊鹿」(明治四十二年・一九〇九)であることを確認した。

- (36) (34) 参照。

- (37) 細川護立は「春草追憶」と題した回想(『現代の眼』一九六〇年五月)で、三溪が初め百円くらいで預っていた「賢首菩薩」を、細川の「鶴二羽の」と交換した、としている。竹田による別の説もある(竹田前掲書、五十頁)。

- (38) 勅使河原純『菱田春草とその時代』(六藝書房、一九八二年)、四百六十五頁―四百六十六頁参照。同書によると、「落葉」はまず秋元洒汀により、文展の会期中に三百五十円で購入された。

- (39) 「買入覚」第五卷五十三頁(三溪園保勝会蔵)。

- (40) 瀬木慎一編『東京美術市場史』(東京美術倶楽部、一九七九年)。

- (41) 竹田は、「観山こそ三溪にとつてお気に入りの画家であった」と述べている(竹田前掲書、五十二頁参照)。

- (42) 矢代「芸術のパトロン」(前掲書)、百七十六頁、横山大観『大観自伝』(講談社、一九八一年、初版は一九五一年)、百八―百九頁。

- (43) 竹田道太郎、弦田平八郎による対談(『有隣』第九十二号、一九七五年七月十日)。

- (44) 三溪園に保管されている三溪の蔵書にある『日本美術』(明治四十二年十一月号)の裏表紙には、三溪の字で「流燈」と記されている。

(45) 田中一松、竹田道太郎「田中一松氏に聞く古美術回顧」(『有隣』第百二十号、一九七七年十一月十日)。

(46) 同館には大観の三溪への送り状が保管されている(同館学芸課小倉実子氏の御教示による)。

(47) 『大観と栖鳳』(練馬区美術館一九九七年、根崎光男編) 作品解説より。

(48) 『美術新報』十一巻一号(明治四十四年十一月十七日)、『読売新聞』(明治四十四年十月二十二日)、『日本美術』百五十三号(一九一一年)。

(49) 文展の出品目録で「山路」は非売品となっており、金額の記載がないが(『美術新報』十一巻一号、明治四十四年十一月)、この時最も高額なのが池上秀畝「谷間」の千二百円である。また、『東京朝日新聞』(明治四十三年・一九一〇、十二月七日)には、「流燈」が文部省によって買い上げられた際、百五十円に値切られた(目録には五百円)と記載とされていることから考えても、三溪の購入金額は、やはりかなりの高額であった。

(50) 斎藤前掲書、二百三十九—二百四十頁。

(51) 斎藤前掲書、百十一頁。この大観会は、辰沢延次郎を中心とした大観の後援会。本書によれば、この「大観会」の参加者は大正三年(一九一四)の日本美術院再興の時にも賛助会員として貢献したとされており、既に大観にかなりの後援者がいたことを示している。

(52) 斎藤隆三は「日蓮」が辰沢によって依頼されたとして、大観会の会員は、大観に資金を援助することによって作品を注文したり、或いは作品が入手できるような便宜が図られる、といったことが考えられる。なお、「日蓮」と同主題の作品は『横山大観』第一巻(横山大観美術館、大智經之監修、大日本美術、一九九三年)にもう二点記録されている。また練馬区美術館学芸員野地耕一郎氏の御教示によると、他にも複数存在するとのことである。

- (33) 前掲書古田解説参照。
- (54) 『現代日本美術全集2 横山大観』（集英社、一九七二年）細野正信解説参照。また、『日本美術院百年史第四巻』に収録されている「原三溪関係年譜」にも大正二年（一九一三）に大観が原家に一ヶ月滞在し「柳蔭」を描く、という記載があるが、裏付ける資料はない。
- (55) (33) 前掲書古田解説参照。
- (56) 細野は、稲田前東京国立博物館長の指摘によるとしてこの説を述べている（(54) 前掲書前掲部分に記載）。
- (57) 本図は十五世紀後半と推定されており、また、画家の関心が山水の大景観の中に息づく人間の営みにあつたことが指摘されている（海老根聡郎編『日本水墨名品図譜』二「水墨画の展開」毎日新聞社、一九九二年、作品解説による）。一方「柳蔭」ではよりいっそう人物を強調しているといえる。
- (58) 「買入覚」によると、三溪は大正五年（一九一六）に千五百円で購入している。元東博学芸員古田亮氏の御教示によると、東京国立博物館の台帳に大正二年の記載があり、落款、印章などもそれを否定するようなものではないため、定説化したとのことである。
- (59) 図説・横浜の歴史編集委員会編『図説・横浜の歴史』、横浜市民局市民情報室広報センター、一九八九年、二百八十一—二百八十二頁。

付記

本稿は、明治美術学会で口頭発表した内容に加筆修正したものであり、平成十二年度第一回堀越泰次郎記念奨学基金による研究成果の一部である。本稿をまとめるに当り、三溪園保勝会及び元同会学芸員石田治郎氏を初め、懇切に御教示くださり、また快く御協力いただいた方々に深く感謝申し上げる。

資料① 「美術品買入覚」より近代美術品売買記録抜粋

*売却された作品は網を掛け、作品以外の購入に斜線を掛けた。金額、制作者名、作品名の記載及び順序は資料のままである。
頁数は執筆者が付けたものであり、資料の1頁を1とする。

冊数	頁数	購入年	金額	制作者名、作品名など	所蔵、展覧会歴	備考
1冊	1	明治26	一金貳拾円也	渡辺省亭 雪中群鴉雨中白鷺		「大正13年春正月書画目錄清風居藏」に「烏鸛及幅」の記載あり
	6	26	一金三円五十匁	小田梅仙 絹本		
	7	26	一金七円也	省亭絹本 雨中及柳二落花		
	9	26	一金六円六十五匁	野口幽谷 竹に梅		
	14	27	貳円五十匁	省亭 雪中小幅箱共		
	24	27	金五円也	竹堂 白狐図		岸竹堂
	26	27	金拾貳円也	和亭 花鳥及幅		滝和亭
	27	27	入金九円五十匁	和亭二幅對寶代		
	49	30	一金三拾五円也	梅仙 山水		
2冊	31	35	一金五十円々	雅邦及幅		橋本雅邦

冊数	頁数	購入年	金 額	制作者名、作品名など	所蔵、展覧会歴	備 考
	59	39	一金七拾五円	是真印籠		柴田是真
	81	40	一金六百九十七円也	夏雄銀びん南京皿青磁大皿竹篋卓軸盆等		加納夏雄 6 点の内
	96	41	一金千円也	雅邦布袋		全 6 点
	96	41		豊干		
	96	41		暮靄山水		
	96	41		猿		
	96	41		秋景山水		S 家に贈呈（「三溪文庫除去品覚」に記載あり）
	96	41		小品山水		
3 冊	97	41	一金千円也	観山 大原行幸巻物	東京国立近代美術館蔵 国画玉成会展覧会	
	97	41	一金百円	春草筆 菩薩說法画		
	97	41	一金貳百五十円	廣湖 加茂競馬図		高橋廣湖
4 冊	1	42	一金千八百八十円也	雅邦先生画 瀑布山水 230		
	1	42		南山四皓二幅対 550		
	1	42		四皓一幅物 230		
	1	42		竹に鶏 120		
	1	42		古画山水芳崖式 250		芳崖式の意味不明
	1	42		芳崖雀 250		
	1	42		観山十六羅漢 250		1909 賣却
	1	42	一金三千五百五十円	雅邦買入代 春秋楼閣山水又幅 1300		1910 賣却（4 点で 4500 円）
	1	42		秋の山路田舎暮又幅 900		
	2	42		湖樓月夜又幅 550		
	2	42		せきれい又幅 300		1910 年賣却（4 点で 4500 円）
	2	42		春秋山水又幅 500		1910 年賣却（4 点で 4500 円）
	2	42	一金千九百五十円	雅邦三点購入 上宮漁父又幅 1000		
	2	42		山水長巻 750		
	2	42		達磨 200		「松風閣蔵品展観図録」（東京美術倶楽部で予定され中止された売立の目録）に図版あり
	2	42	一金貳百五十円	雅邦 早春美人図		
	3	42	一金貳百貳拾円	雅邦 懸想文図		
	6	42	入金貳百円	雅邦 春山水観山十六羅		

冊数	頁数	購入年	金 額	制作者名、作品名など	所蔵、展覧会歴	備 考
	8	42	一金六百円	雅邦 霊昭女		1910 賣却 (4 点で 4500 円)
	12	42	一金千円	観山先生謝儀		
	18	43	一金千三百八十八円	栖鳳 富士川幅	東京国立博物館 (以下東博と略称)	「松風閣藏品」に記載(「富士川大 勝図」と記載)東京国立博物館、 原良三郎より昭和 23 年購入
	22	43	一金五千円	雅邦 狙公双幅	東博	若杉より 原良三郎より昭和 23 年 購入
	24	43	入金四千五百円	雅邦 幅賣却 山水双幅 せきれい双幅 霊昭女幅		
	27	44	一金貳百円	□□雲海 竹取翁		米原雲海
	27	44	一金貳百貳十円	同 権敦木彫		
	27	44	一金百円	同 月		
	27	44	一金貳百円	正素氏太閤像		橋本正素
	27	44	一金四百貳十八円	吉田水彩画八枚		吉田博
	27	44	一金百拾円	観山 柳に鶯		
	28	44	一金百四十五円	春草 三幅対		
	28	44	一金百五十円	観山 紅葉山水		
	28	44	一金百円	観山 漁夫図		
	28	44	一金百八十円	菊慈童 朝雲作		山崎朝雲
	28	44	一金百八十円	山□ 朝雲作		不明
	28	44	一金四百三十円	法□□笑	第 2 回日本彫刻会	平櫛田中 法度二笑
	28	44	一金千円	桜谷 鹿屏風		木島桜谷
	28	44	一金貳百円	正素 一休像	東博、第 5 回文部省美 術展覧会 (以下文展) (裏状)	東博、原良三郎より昭和 23 年購入
	29	44	一金貳百円	寛方 竹林聴法図	東博、第 5 回文展 (裏状)	荒木寛方 東博、原良三郎より昭和 23 年購入
	29	44	一金百円	青村 竹取翁額	東博	前田青邨、東博藏品は軸装
	29	44	一金五百円	油繪 □前読書		
	29	44	一金貳百円	高原の朝油繪額		
	29	44	一金貳百五十円	観山 雪の朝		
	29	44	一金貳百円	観山 周茂淑		
	29	44	一金九拾五円	大観 達磨		

冊数	頁数	購入年	金 額	制作者名、作品名など	所蔵、展覧会歴	備 考
	29	44	一金貳百三拾円	大観 帰牧		S 家へ贈呈（「三溪文庫除去品覧」）
	29	44	一金八拾三円	大観 幅 漁図		
	29	44	一金五拾五円	廣湖 豊干		高橋廣湖
	30	44	一金八拾円	大観 柳に燕		
	30	44	一金七拾円	大観 風雨山水		
	30	44	一金三拾貳円	竹坡 蟬丸		尾竹竹坡
	30	44	一金三拾円	紫紅 渡し舟		今村紫紅
	30	44	一金三拾円	春草 小鳥		
	30	44	一金三拾貳円	紫紅 猿		
	31	44	一金三百円	観山 寒山拾得双幅		山川氏に贈呈（「三溪文庫除去品覧」）
	31	44	一金六拾八円	大観 石橋の雨		
	31	44	一金貳百三十円	春草 瀑布双幅		
	32	44	一金貳百円也	正素 四季花鳥		
	32	44	一金貳百八十円也	春草 鳩	滋賀県立近代美術館 （温厩）	「松風閣藏品展観図録」記載
	32	44	一金貳百円也	大観 虎溪三笑		
	32	44	一金百円也	紫紅 竹取双幅	不明	
	34	44	一金貳百三十円	雲海 専念像	不明	
	34	44	一金千円	下村観山謝儀		
	36	45	一金五百円	紫紅 護花鈴	第5回文展（装状）	畫友会妙一記念館
	36	45	一金千円	大観 山路謝儀	京都国立近代美術館	
	36	45	一金貳百五十円	大観 観音幅		
	36	45	一金貳千百円	観山 修羅道巻物		東博、原良三郎より昭和23年購入
	36	45	一金千八百円	大観 陶淵明屏風		陶淵明の誤字
	36	45	一金百貳十円	〃 春雨図		
	36	45	一金千円	大観 日蓮謝儀	東博	
	36	45	一金三百円	観山 闘鶏		
	36	45	一金六拾円	靱彦 相撲		
	37	45	一金五拾円	青村（ママ）京の橋		
	37	45	一金千円	田仲（ママ）寒山拾得達磨		
	37	45	一金七拾円	内藤作平家少女		内藤伸
	37	45	一金貳千円	下村先生壁画謝儀		三溪園松風閣（関東大震災で崩壊） 「四季花鳥図」（草花壁画）

冊数	頁数	購入年	金 額	制作者名、作品名など	所蔵、展覧会歴	備 考
	37	45	一金百五十円	栖鳳 柳に雲雀		「松風閣藏品」に記載（柳寒雀） 「大正 13 年春正月書画目録清風居鑑藏」では「寒柳双雀」 東博、原良三郎より昭和 23 年購入
	37	45	一金五百円	朝雲作牛		
	37	45	一金三百円	古径 極楽井戸	東博	
	38	45	一金百円	暁海作思ひ		
	38	45	一金参千円	大観 瀟湘八景謝儀	東博 第 6 回文展	東博、原良三郎より昭和 23 年購入
	38	45	一金千五百円	安田 夢殿	東博	安田靫彦
	38	45	一金七百元	青村 御輿振り	第 6 回文展 東博	東京国立博物館、原良三郎より昭和 23 年購入
	38	45	一金千五百円	紫紅 近江八景	第 6 回文展（2 等賞）	東博、原良三郎より昭和 23 年購入
	38	45	一金百円	大観 達寺晚鐘		
	38	45	一金三十円	浩然 掃落葉図外に一		速水御舟
	42	大正 2	一金三百五十円	観山 辻説法		
	42	2	一金七拾円	栖鳳 犬		
	43	2	一金貳百五十円	大観 赤壁		
	43	2	一金貳千円	大観 松並木	東博 第 7 回文展	東博、原良三郎より昭和 23 年購入
	44	2	一金貳百五十円	大観 陶淵明		陶淵明の韻字
	44	2	一金七十五円	天風 寒山拾得		
	44	2	一金五十円	草風 河原九大呂		長野草風
	44	2	一金三十拾五円	鷄村 秋池		
	45	2	一金三百円	鷄村 町三趣		
	45	2	一金貳百円	正素 太閤	東博	
	45	2	一金百円	空明 美人		小茂田青樹
	45	2	一金百円	浩然 錦木		
	45	2	一金百五十円	耕花 お国三左		山村耕花
	46	2	一金五百円	田仲氏 仙人木彫	東博 再興第 1 回日本美術院展覧会（以下院展）	東博、原良三郎より昭和 23 年購入
	46	2	一金三百円	寂静木彫		
	46	2	一金貳百五十円	□実木彫		
	47	2	一金貳千五百円	大観 富士図屏風禮	東博	東博、原良三郎より昭和 23 年購入

冊数	頁数	購入年	金 額	制作者名、作品名など	所蔵、展覧会歴	備 考
	48	2	一金三百円	おだやかな朝油繪		中川八郎
		2	一金七百元	青村 白描巻物		
	50	3	一金貳百元	紫紅 柳に鳥二枚折		南より買い入れ 東京国立博物館、 原良三郎より昭和 23 年購入
	52	3	一金百五十円	紫紅 風匂二幅		
	52	3	一金百円	紫紅 駅路の朝		
	53	3	一金四百円	内藤伸 太子彫刻		
	53	3	一金貳百八十円	白嶺 印度□人三人		吉田白嶺
	53	3	一金四百円	佐藤 悉達太子密教徒二体		佐藤朝山
	53	3	一金三千五百円	雅邦 虎溪三笑図		8500 円で 1922 年賣却
	54	3	一金貳百円	白瀧氏油繪二枚		白瀧幾之助
	54	3	一金貳百円 此分昨年付落しの分	白瀧 肖像二枚		
	54	3	一金貳千円	大観 長江の巻		東博、原良三郎より昭和 23 年購入
	54	3	一金千円	大観 若葉	東京府大正博覧会	
	54	3	一金三千円	大観 遊刃双幅	東博 再興第 1 回院展	東博、原良三郎より昭和 23 年購入
	54	3	一金貳百五十円	内藤伸 山上		
	54	3	一金七十円	佐野一星 梅		
	54	3	一金三百円	魔 佐藤朝山		
	55	3	一金壹千円	熱国の巻 紫紅筆	東博 再興第 1 回院展	東博、原良三郎より昭和 23 年購入
	55	3	一金千三百円	靱彦 産の袴	東博「御産の袴」	
	55	3	一金七百元	青村 湯場三幅対	東博 再興第 1 回院展	
	55	3	一金五百円	御舟 紙漣場		
	55	3	一金千三百円	古徑 踏絵	東博	
	55	3	一金貳千円	観山 白狐二枚折	再興第 1 回院展	東博、原良三郎より昭和 23 年購入
	56	3	一金五百円	田仲 木によりて	東博 再興第 1 回院展	東博、原良三郎より昭和 23 年購入
	56	3	一金四百円	静水 白砂青松		
	56	3	一金五百円	寛方 秋の社	ミュージアム氏家	
	58	4	一金五百円	紫紅 蜜柑畑 同紅梅 同梅林 鶏村 本願寺 同増上寺 青樹 あさみ 古郷 竹河岸 壺中 土蔵 同 紺屋 御舟 今戸	第 1 回赤曜会	
	58	4	一金八十円	古郷 秋晩田家		黒田古郷
	59	4	一金三百五十円	春草 落葉	永青文庫 第 3 回文展 (2 等)	

冊数	頁数	購入年	金 額	制作者名、作品名など	所蔵、展覧会歴	備 考
	59	4	一金貳百円	静水 桜美人		
	59	4	一金四千円	五十三次巻 九巻	東博	東博、原良三部より昭和 23 年購入
	59	4	一金百七十円	大観 寿老人		
	59	4	一金四百円	青村 龍宮の巻		
	60	4	一金九十三円	竹橋 溪山二幅		小野竹橋
	60	4	一金百円	跡見 油繪二枚		跡見花溪
	60	4	一金三十円	青村 林和靖		
	60	4	一金八十円	青樹 竹と梅		
	61	4	一金三百円	未醒 馬額		
	61	4	一金千五百円	横山大観 柳屏風礼	東博	東博、原良三部より昭和 23 年購入
	62	4	一金百三十拾円	東京横浜真景写十三葉 青樹二枚 御舟壹枚 鷄村 風堂一枚 古郷宅枚		
	62	4	一金五拾円	鷄村 山水二幅 御舟 壹枚 青樹二枚		
	63	4	一金三百五十円	雪棚 藤井達吉□□		
	63	4	一金百円	山村耕花 演劇屏風		
	63	4	一金貳百円	寛方 乳廉図	東博 再興第 2 回院展	東博、原良三部より昭和 23 年購入
	63	4	一金三百円	静水 三幅對		
	63	4	一金七拾円	大観 漁父山水	漁父山水 (「漁樵問答」 「竹雨」)「竹雨」のみ 東博再興第 2 回院展	東博、原良三部より昭和 23 年購入
	64	4	一金百五拾円	岳陵 人物		
	64	4	一金百六拾円	紫雨 四季山水		新井紫雨
	64	4	一金百円	未醒 小品		
	64	4	一金千貳百円	今村紫紅 獅子謹筆		
	64	4	一金三百拾五円	風堂 双幅 御舟 さざんか 岳陵 山の町 大月 たで 青樹 柘榴 紫紅 桶狭間	第 2 回赤曜会	河杉氏へ贈呈 (「三溪文庫除去品覚」)
	64	4	一金七百円	青村 朝鮮の巻	東博 再興第 2 回院展	
	64	4	一金千五百円	古径 阿弥陀堂	東博 再興第 2 回院展	
	65	4	一金三千円	観山 屏風 弱法師	東博 再興第 2 回院展	
	67	5	一金四百五十円	鉞斎 (ママ) 青緑山水		
	67	5	一金百円	同水墨寒林山水		
	67	5	一金貳百五円	同月瀬山水		
	67	5	一金三百五十円	鉞斎 山水巻		

冊数	頁数	購入年	金 額	制作者名、作品名など	所蔵、展覧会歴	備 考
	68	5	一金五百五十円	鍊斎 名人帖		
	70	5	一金百五十円	鶏村 早春二幅對		
	70	5	一金貳百円三十円	大観 墨竹		松田へ440円で賣却(「三溪文庫除 去品覚」)
	70	5	一金七十五円	御舟 早春		
	70	5	一金千円	未醒 琉球卷		
	72	5	一金千円	朝山 シャクンタラ	東博	
	77	5	一金七百元	岳陵 繪巻物		中村岳陵
	77	5	入金七百元	岳陵繪巻中村君に返す		
	82	6	一金百円	古径 竹林小品		
	84	6	一金八百八十円	鍊斎 芳野山		
	85	6	一金千五百円	観山 達磨		
	86	6	一金百五十円	大観 桃小鳥		
	86	6	一金五百円	鍊斎 仙丹図		
	86	6	一金千貳拾三円	鍊斎 桃源山水		
	86	6	一金六百三十六円	鍊斎 山水		
	86	6	一金六百四十円	観山 二幅鯉子 寒山		石部氏に贈呈(「三溪文庫除去品覚」)
5冊	10	7	一金貳千六十円	雅邦 龍二枚折		
	14	7	一金三百七円	紫紅 紅白梅		
	14	7	一金五百三十八円	紫紅 観瀑双幅		
	14	7	一金六百五十八円	靱彦 西雄望江戸		
	14	7	一金四百八十八円	鍊斎 柳堤帰牧		
	15	7	一金五百五十八円	古径 宇津の山路		
	18	7	一金千五百円	観山 老子		
	18	7	一金百貳拾五円	紫紅 柳に雀		
	18	7	一金百五十円	古径 菊幅		
	19	7	一金千百八十七円	紫紅 政宗像	横浜美術館	
	19	7	一金貳百八十五円	古径 菊		
	19	7	一金貳百三十五円	紫紅 寒林		
	23	7	一金千貳拾六円	栖鳳 鶏幅		東博、原良三郎より昭和23年購入
	23	7	一金貳百九十貳円	大観 虹山水		
	25	7	一金三百五十円	紫紅 文殊大幅		
	26	7	一金四百円	紫紅 風神雷神	東博	

冊数	頁数	購入年	金 額	制作者名、作品名など	所蔵、展覧会歴	備 考
	26	7	一金三千五百円	大観 琵琶八景巻 謝礼		
	26	7	一金貳千三百七十円	観山 納涼図		
	26	7	一金貳千貳百円	古径 風呂場	東博	
	26	7	一金千貳百円	青村 高野巻	東博 再興第5回院展	
	30	7	一金四百十九円	春草 椿に猫		
	33	7	一金千円	春草 朝の海		
	33	8	入金千八百九十六円貳	十八せん 鏡斎 大観 竹		
	35	8	入金七百八拾貳円	鏡斎 御舟 今戸賣却		
	41	8	入金千貳百四十四円	鏡斎 山水 大観 春先 観山 布袋三幅		
	45	8	一金千三百円	平櫛□鳥有山人		
	51	8	入金四千円也	鏡斎 青緑山賣却		
	51	9	金六千〇六十円	鏡斎 蓬萊山山水		
	51	9	金五百拾三円	弧月 初冬山水		西郷弧月
	51	9	金壹萬三千三百円	春草 鹿	西宮市大谷記念美術館	若杉より 「松風閣藏品展観図録」に図版あり (秋林遊鹿)
	51	9	入金千〇貳十円	鏡斎 狗子鯉山水		
	73	10	一金五千円	大観 洞底夜謝礼	東博	東博、原良三郎より昭和23年購入
	73	10	一金千円	大観 白菊		
	76	10	一金三千五百円	古径 けし花二年分補助		
	76	10	一金千七百円	青村 魚屏風同	再興第7回院展	
	76	10	一金千百円	南泉 簞彦 筆		
	83	11	一金貳千六十六円	観山 維摩		若杉より
	84	11	一金三千円	田仲 彫刻		
	90	11	入金八千五百円	雅邦 虎溪三笑賣入		
	102	12	一金八百三十六円	鏡斎 秋山水		
	102	12	一金八百四十四円	古径 重盛		
	102	12	一金千三百五十円	鏡斎 山水		

資料②「美術品買入覚」に見る原三溪旧蔵美術品年間購入金額及び
近代美術作品の作品数、金額推移表

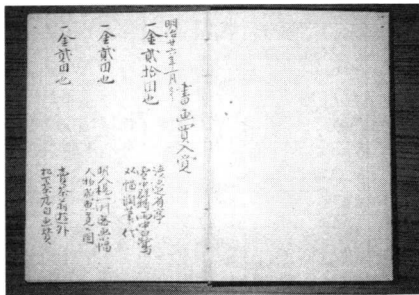
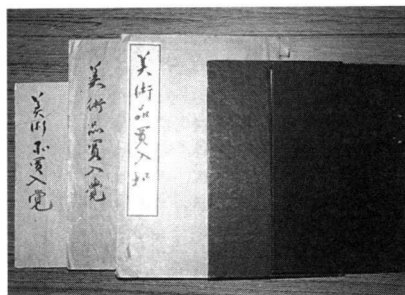
	近代作品数	近代作品金額(円)	年間購入数	年間購入金額(円) / 売却差引額
明治26年・1893	4	37.15	25	249.2 / 249.2
27・1894	3	19.5	150	2009.4 / 1813.1
28・1895	0	0	189	3702.35 / 3211.45
29・1896	0	0	240	4363.6 / 3983.6
30・1897	0	0	174	13631.45 / 13306.45
31・1898	0	0	142	7032 / 7032
32・1899	0	0	130	14995.5 / 14995.5
33・1900	0	0	116	10555.8 / 10355.8
34・1901	0	0	150	50193 / 50193
35・1902	1	50	121	42703 / 42703
36・1903	0	0	202	70837.51 / 56757.51
37・1904	0	0	61	14281.59 / 14081.59
38・1905	0	0	105	34574.27 / 28665.28
39・1906	0	0	192	92516.4 / 76857.4
40・1907	1	697	195	88488.63 / 79345.63
41・1908	1	0	2425	96 39541 / 39441
42・1909	17	7850	162	118486 / 117929
43・1910	3	6900	103	142532 / 136023
44・1911	34	6690	76	43912 / 43912
45・大正1・1912	20	15950	40	20796 / 20796
2・1913	19	10455	60	98374 / 87874
3・1914	22	22700	52	51607 / 15049
4・1915	48	16613	100	26789 / 26664
5・1916	10	4660	122	143553.45 / 136018.45
6・1917	13	8210	220	257660 / 255962
7・1918	15	167645.5	162	206834 / 203834
8・1919	0	0	161	616956 / 520226
9・1920	5	21373	123	485788 / 476468
10・1921	3	6300	123	177705 / 174655
11・1922	2	1680	133	264088 / 238212
12・1923	2	1600	117	372933 / 371558
13・1924	0	0	5	5380 / 6000
14・1925	0	0	9	43070 / 29070
15・1926	0	0	74	104106.25 / 28262.25
昭和2・1927	0	0	19	15279 / 15279
3・1928	0	0	49	13916.5 / 143583.5
4・1929	0	0	13	15695 / 11195

注) 双幅は一点に数えた。金額は「美術品買入覚」のみであるが、作品数は蔵帳、その他の資料を参照した。

資料③ 三溪旧蔵近代美術品作家別比較表 *一括購入は全て同額とした

作家名	作品数
横山大観	35
下村観山	31
橋本雅邦	30
今村紫紅	25
速水御舟	21
富岡鉄斎	20
小林古径	16
前田青邨	15
菱田春草	14
安田靉彦	13
平櫛田中	9
牛田鶏村	8
橋本静水	7
竹内栖鳳	6
佐藤朝山	6
小茂田青樹	6

作家名	購入金額(円)
横山大観	31008
下村観山	20926
橋本雅邦	20060
菱田春草	15856
富岡鉄斎	13118
小林古径	10737
今村紫紅	8964
前田青邨	6280
平櫛田中	5430
安田靉彦	4618
速水御舟	2878.5
竹内栖鳳	2364
佐藤朝山	1750
橋本静水	1700
牛田鶏村	603
小茂田青樹	336



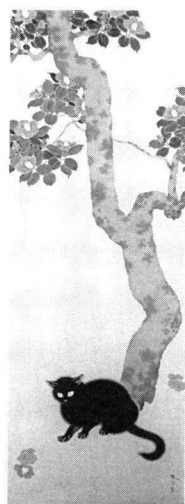
①「美術品買入覚」全5冊及び第1巻1頁目 三溪園保勝会蔵



②橋本雅邦「狙公（猿回し）」双幅
絹本着色 各 166.8 × 83.5cm
東京国立博物館蔵



④菱田春草「秋林遊鹿（鹿）」1 幅
絹本着色 115.5 × 50.3cm
西宮市大谷記念美術館蔵



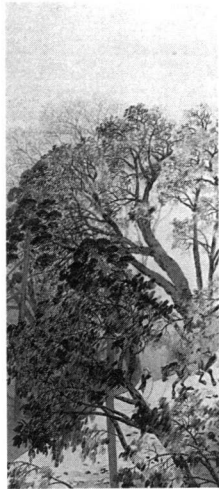
③菱田春草「椿に猫」1 幅
個人蔵



⑦横山大観「山路」1幅
絹本着色 148.6 × 68.4cm
個人蔵



⑥横山大観「山路」1幅
絹本着色 159.1 × 70.2cm
京都国立近代美術観蔵



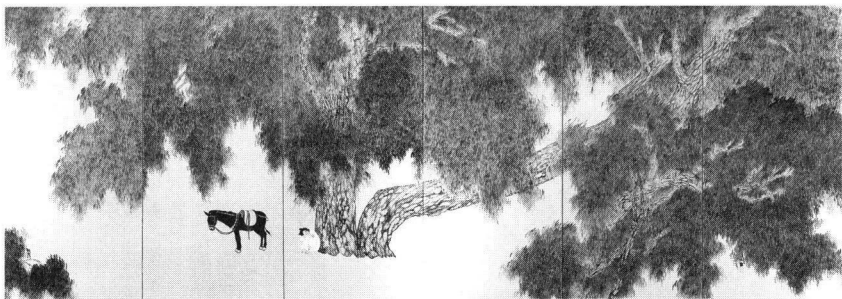
⑤横山大観「山路」1幅
絹本着色 151.1 × 69.4cm
永青文庫蔵



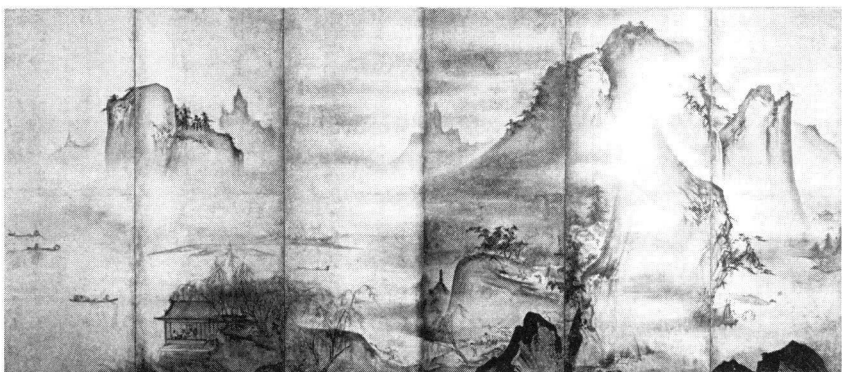
⑨横山大観「日蓮」1幅
※「日蓮大士(ママ)初めて題目を唱ふる図(辰
沢延次郎氏蔵)」(『美術新報』9巻7号(明
治43年5月)より転載)



⑧横山大観「日蓮上人」1幅
絹本着色 181.6 × 90.9cm
東京国立博物館蔵



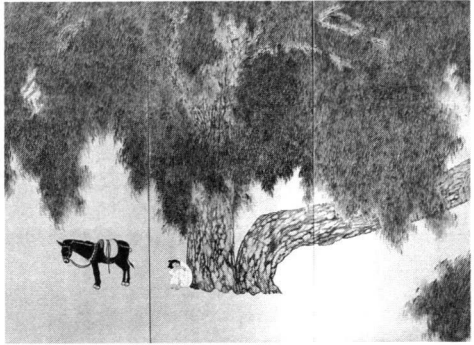
⑩ 横山大観「柳蔭」6曲1双
紙本着色 各 191.8 × 546.8cm
東京国立博物館蔵



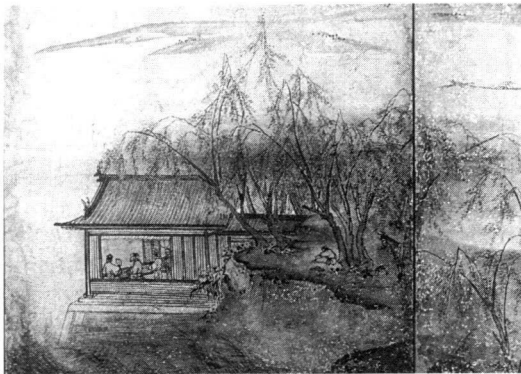
⑪ 伝周文「四季山水図屏風」6曲1双のうち右隻
紙本墨画淡彩 重要文化財 各 150.4 × 355.4cm
東京国立博物館蔵



⑬ 横山大観「柳蔭」部分



⑭ 横山大観「柳蔭」部分



⑮ 伝周文「四季山水図屏風」部分

A Collector of Japanese Modern Art and the Record of his Collection
— A Study about HARA Sankei and the Bijutsuhin Kaiire Oboe —

MIKAMI, Miwa

This paper is about Hara Sankei (1867-1939), a wealthy silk trader from Yokohama who was not only a well-known collector of art but also one of the few patrons of Japanese modern art. Moreover he is particularly known as a patron of The Japan Art Institute.

The record *Bijutsuhin Kaiire Oboe* is a precise inventory of his art collection that belongs now to the Sankeien Hoshokai Foundation.

The *Bijutsuhin Kaiire Oboe* consists of five volumes and was compiled by Sankei himself. It was donated by one of his descendants to the Sankeien Hoshokai Foundation in 1987 among other documents related to Sankei.

In my paper I focus on Sankei's role as an ardent collector of Japanese modern art by gathering and analyzing the art works of his collection.

(人文科学研究科哲学専攻 博士後期課程)